

現代美術における作為と無作為

-絵画上の「線」の意味に沿って-

芸術研究科 芸術制作表現専攻 A15ZD01

金 孝妍

モダニズム絵画や近代から現代につづく既存の絵画の様式に対して、絵画の意味を根本的に問い直すことで絵画の新しい方法論は生み出される。既存の様式にとらわれない新しい表現を提案することに価値があるという前提から、絵画に限定して取り掛かると、線というテーマにたどり着いた。

本論文で定義する線とはさまざまな線の中でも、「線」以外の意味を浮かべさせないものに範囲を限定している。具体的なイメージになるような線、例えば、文字や図形など、ある意味につながるような形やイメージなどはなるべく避けて単純に「線」に集中するために「一振りの線」に限定するのである。

なぜ線なのか。絵を描くということは作者の行為として手の動きがもっとも大きい。何か描こうとする時に線が出てくる。線は描く行為の基本となる単位になる。

作為と無作為

描くイメージより行為に集中すると材料や道具、環境といった相互作用に注目する。ここで、作為と無作為が浮上してくる。

作者の意図を作為とし、作者の意図とは別として動く自然法則の力を無作為と定義して、作為と無作為の共存について考察する。

作為と無作為は絵画上で、作者の意図と材料や道具の性質、そして環境といった様々な影響が相互作用の形で絵画を成している。作為と無作為は常に交わる構造となっており、片方だけでは成り立たないものである。すなわち作為は人間のことで、無作為は人間を含む自然のことであり、人間と自然は常に接しては影響し合っている状態で何かを成している構造として成立している。

作品シリーズについて

「一線」「存在の波」「満開の線」「水の足跡」

本論文で主に扱われる4つの作品シリーズ「一線」「存在の波」「満開の線」「水の足跡」を中心に「線」というテーマに沿って分析をする。

「一線」(写真1)では絵画制作の主な動きである反復する行為について取り掛かり、一本の線を無数に反復し描き、その結果のイメージも一線となる。初めの一振りの行為も無数に反復する一振りの行為も結果と同じ同一上に置かれる。反復することにより一線という意味を薄くして、反復という行為により強調させていることが分かる。行為に注目させることにより、絵画制作過程に注意を向かせる。絵画の主な様式として、結果である絵の完成を目的に無数の作者の行為が繰り返される。その構造に対しての問いがきっかけとなり「一線」という作品が出来上がる。反復の意味が浮上したことから、作者の行為が重要であることが分かる。

次に、制作は「存在の波」に繋がる。見えないものを見せようと、より意識したことから、そこに起こってくる線の生成について分析した。

「存在の波」(写真2)は絵画の支持体となる画面にものを置き、その輪郭を線でなぞると、外側に曲線が増幅する。ものが置いてあった場所は余白として残ることで、線の輪郭だけが、無いものの存在を浮き出させている。ものとの関係で線の形が決まる。

「満開の線」(写真3)は水の力で画面を傾けたりして、重力の影響で水が動き、岩絵具も動かされる。水が乾けば岩絵具は定着し、きれいな発色と変わる。手で描きこむ手法ではなく、重力の働きを利用して、水の力で画面に絵を残すことで、作為と無作為の相互作用が目に見える。画面の斜面を利用することで水が流れて動くことから、次の「水の足跡」シリーズへと発展する。

「水の足跡」(写真4)は、立体のあるものを紙で型を取るように包み、立体になった紙の状態ですべての凹凸やしわをなくして完全フラットにする。傾けて端から墨を一滴ずつ流して線を描く。凹凸がある表面を墨は水の力で重力や自然法則に従い、様々な線を描く。

絵画とは何であるかについて問うことから、絵画の平面性は無視できない問題である。立体で線を描き最後はパネルに水張りをし、すべての凹凸やしわをなくして完全フラットにする。立体で生成した線は平面に戻し、同じ線でありながら空間を変えて、絵画に圧縮し見せている。

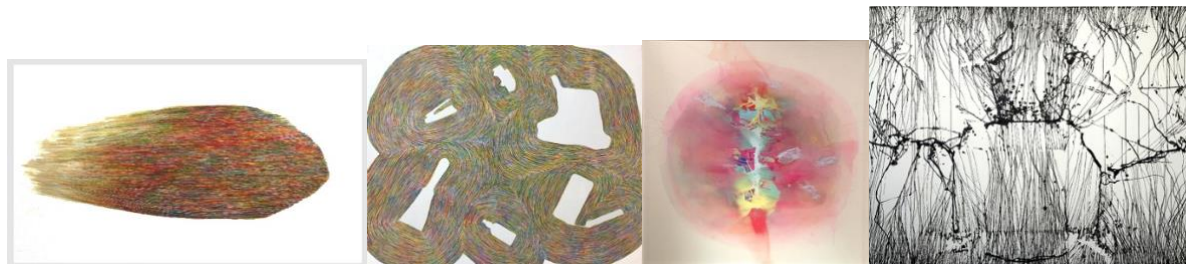
線は作為のもとで流れるきっかけに出会う。筆から墨水が離れる時点から紙の凹凸や重力の自然法則に従い、流れながら様々な影響を線として痕跡を残す。

空間ありきの線ということで、空間上の線が絵画の平面上で表すことから分かる線の意味を考察し、美術上の線の意味から絵画を読み直し、現代美術における新しい表現の可能性を提示する。

2次元である絵は、3次元以上のことを表す媒体となる。現代美術において、絵画の根本的な

ことへの還元は、新しい方法論を生み出す。立体から平面へ、3次元から2次元へ、そしてまた高次元への道を開く鍵が絵の中で読み取れることへ向かって線の意味は広がる。

線に対しての絵画上での意味を明らかにし、また、その過程で作為と無作為という、人間と自然の共存を本論文で明確にし、現代美術の新しい絵画という方法論を提案する。



①

②

③

④

①「一線」シリーズ参考写真

②「存在の波」シリーズ参考写真

③「満開の線」シリーズ参考写真

④「水の足跡」シリーズ参考写真